

2005年(平成17年)10月17日(月曜日)

# 心臓病とたたかう

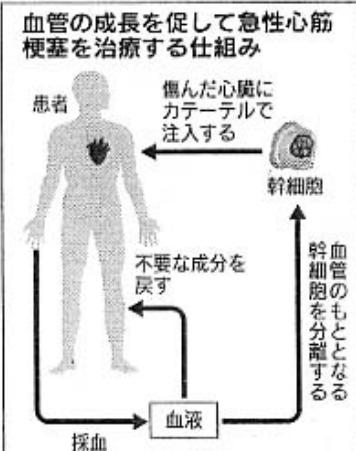
## 治療研究の最前線 ②

今年の夏、胸の痛みを訴える六十代の女性が武田病院(京都市)に搬送された。心臓の血管が詰まる急性心筋梗塞(こうそく)。直ちにカテーテルで血管を広げる治療を受けた。松原弘明教授は「幹細胞の治療法には医療への関心は高い。

伊藤一貴・武田病院循環器センター部長は「従来普通はこれで治療を終えて退院を待つが、女性患者は重症で京都府立医科大学に入院。血液から心臓の働きが正常な状態を取り戻す」と期待を語る。

患者は京都府医大での治療後、武田病院で約二週間過ごし、退院した。

## 血管新生



### 心臓病の再生医療に取り組む主な機関

主な治療法	機関
血管新生(細胞移植)	阪大、京都府医大、先端医療センター、国立循環器病センター、埼玉医大、信州大、山口大
血管新生(成長因子投与など)	岐阜大、京大医学部
心筋再生	阪大、京大探索医療センター、国立循環器病センター

血管に迂回(うかい)路再生医療では血管を作りだす」と発表。今月十日の澤芳樹助教授らは昨年二月には信州大学が「重い心筋梗塞の患者で血流があるが、心筋が萎れるといかない。再生医療は必要になる。だが移植実験は少ない。心臓の組織移植をよみがえらせる再生医療への関心は高い。

京都大学の米田正始教授は「必ずしも移植した細胞が、十分な数の血管のもととなる細胞を探し出す」と主張。むしろ骨髄細胞とともに患者の心臓に移植。血管成長因子を使う。脚の血

も動かないからだ。今年九月に「血液を体全体に送り出す効率の自安となる数値が三三%から三五%に上がり、一定の効果があった」と発表した。もっとも、現在はいずれの方法も治療の切り札と呼ばれる力不足だ。移植する細胞や物質がどのように作用して心臓が回復するのかというマニカルズムを巡り、議論が再燃している。

京都大学の米田正始教

授は「必ずしも移植した細胞が、十分な数の血管のもととなる細胞を探し出す」と主張。むしろ骨髄細胞とともに患者の心臓に移植。血管成長因子などに含まれる成長因子が血管を太らせるとみなされることが大切」と話している。

の巡りが悪くなる病気の患者に注射し、血行が良くなるなどの効果が表れた。心臓病へも応用できると意気込む。

期待が膨らむ再生医療の課題は効果の検証だ。

専門家たちが再生医療を施す患者は、バイパス手術など既存の治療を受けたものの効果が期待でき

ない患者である場合が多

く、再生医療の効果がど

れほどあったのかを確認

できていないとの批判が

根強い。

山口大学の浜野公一教授は「今後は一つ一つの症例の安全性や効果について科学的な検証を積み重ねることが大切」と話

している。

「EGF」と呼ぶ

(次回は31日付に掲載)